
老夫婦

黒崎メグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

老夫婦

【Nコード】

N7311R

【作者名】

黒崎メグ

【あらすじ】

何でも屋で働き始めた哲^{てつ}は、依頼である老夫婦の家を訪ねることになる。そこで目にした老夫婦の夫婦愛とは――。＊「Smile Japan」企画、および被災地の皆さまを応援しています。

高校を卒業した俺は、在学中も世話になった佐伯さんのところで働くことになった。佐伯さんが営むのは万屋よろずや、いわゆる何でも屋といえるもので、未熟な俺はまだ一人で仕事をさせてもらったことがない。

だからその日、

「哲ちやう、この依頼、お前が行ってこい」

と言つて、任された依頼に俺は半ば浮かれていた。佐伯さんが渡したのは依頼内容が記入された用紙と、簡単な手書きの地図だった。ここから歩いて十五分ほどの小学校近くに×マークが付いている。

説明を聞けば、そこには依頼人の老夫婦が住んでいるらしい。部屋の電球が切れたが、足腰を痛めた体では交換が難しく、万屋に依頼を出したということだった。

しかし、間の悪いことに佐伯さんには他に仕事が入っていた。それでも、老夫婦の生活の直結してくる問題だから、佐伯さんは俺を一人で行かせることを決めたのだ。

俺は佐伯さんの期待に応えるため、地図を手に家まで辿り着いた。そこは、大きくもないが、小さくもない純和風の家だった。苔の生す石垣と椿や松などといった木々がどこか近寄りがたい雰囲気醸し出している。俺はぐりとつばを飲み込んで、その間に設けられた石畳を進んだ。ほんの五メートルほどの距離だったが、えらく長い距離のように感じた。そうして辿り着いた玄関前で、俺は緊張のため深く深呼吸をしてからインターフォンを押す。

「はい……」

と間を置かず機械と通して聞こえた女性の声は柔らかで、俺はほつと肩の力を抜いた。

「すみません、万屋の者ですが」

「ああ、ご足労ありがとうございます。今開けますね」

そこで機械を通した声は途切れ、家の中で人が近づいてくる気配がして、横開きの引き戸が開いた。

姿を現したのは、白い割烹着をつけた老婦人だった。背丈は百八十センチ近い俺なんかより三十センチは小さいのではないだろうか。足腰が目立って曲がっているわけではないが、どこか猫背がちに背中を丸め、皺が刻まれた目元を俺に向けていた。

「こんにちは、万屋の斉藤と申します」

俺がぎこちない笑顔で自己紹介すれば、老婦人は目元の皺をいっそう深くして笑った。

「まあまあ、こんな若い方が来てくださるだなんて。どうぞ、お入りくださにな」

老婦人の言葉に、俺は遠慮がちに靴を脱いだ。

結果だけを言ってしまうえば、緊張するまでもなく、呆気なく依頼は終了した。そうして、俺は夫人に案内されるまま日当たりの良い居間に通された。「今お茶の準備をしますかた、少しお待ちくださいね」と言う言葉とともに夫人は台所へ姿を消してしまった。取り残された俺が、部屋の中に視線を巡らせれば、一番日当たりの良いところに設けられた座椅子で一人の老人が居眠りをしている。佐伯さんは老夫婦と言っていたから、彼が夫人の旦那さんなのだろう。

「あああら、こんなところで居眠りをして……」

湯飲みの乗った盆を手に戻ってきた夫人がそれを見て、呟く声が聞こえた。俺は慌てて姿勢を正す。ゆったりした動作でテーブルの上に湯飲みを置いて老婦人が口を開いた。

「あの人つたら、最近ボケが始まったのか、おかしいことばかり言うんですよ」

「そうなんですか、それは大変ですね」

俺が言葉を返せば、夫人は朗らかに笑った。

「そう言われることは多いですけど、私は大変だと思ったことは一度もありませんよ」

「どうしてですか？」

不躰だとはわかっていたが、俺はあまりにも朗らかに笑った夫人の言葉が不思議でならなかった。

「だって、私はこの人のことが大好きですもの」

一瞬の淀みもなくそう言って、夫人は言った後になって恥ずかしさを感じたのか、赤面した。その姿は、まるで初々しい少女のようだった。

「あら、いけない。お茶菓子を出すのを忘れるところだったわ」

夫人は顔を隠すようにして台所へお茶菓子を取りに戻っていく。

その後姿を見送っていたが、俺は部屋の中で動く気配を感じた。

見れば、居眠りをしていたはずの老人がむくりと起き上がっていた。彼は恨めしそうに、夫人が消えたドアを見やり、そして俺に目を向けた。

「言っておくが、わしはボケてなどおらん。ボケているのはあいつの方だ。あいつなんぞより、わしの方があいつのことを好いているのだからな」

そう言い捨てて、再び居眠りを決め込もうとする姿に俺は苦笑を禁じえなかった。

そして、老婦人に出された茶菓子は、今まで食べたどんな菓子よりも甘い甘い味がした。

（後書き）

お互いをボケていると言い張る老夫婦のお話です。

もともとは他作品に使おうと思っていたネタでしたが、短編に書き下ろしました。

字数制限がある中での執筆だったので書ききれしていない部分があるかもしれません。そう感じる部分がありましたら遠慮なくご指摘ください。

被災地の皆様が少しでも穏やかな気持ちになってくださればいいな、と思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7311r/>

老夫婦

2011年10月7日00時59分発行